

## 異邦人を照らす光

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」、エルサレムにあるヘロデ王の宮殿をおとずれた占星術の学者たちはそう告げました。これがユダヤから始まって世界を変えた大事件の始まりとなります。教会に小さい頃から通っておりますと、この場面は降誕劇で演じたり、紙芝居や、絵本、また多くの美術作品にも描かれる出来事ですので、なんとなくイメージが刷り込まれているように思います。わたくしはこの箇所を読みますと「とおくのひがしから、らくだにまたがって、たびする博士、ようやくユダヤの地」、というこどもさんびかが自動的に頭の中で再生されてしまいます。ほのぼのとした牧歌的なイメージですね。

しかしながら、この不意の来客、予期せざる訪問者によって告げられた情報はヘロデ王のみならず、その町に住む人々を不安に陥れたと福音書記者マタイは記しています。ここでふたつのことを指摘したいと思います。ひとつはイスラエルの怠慢といたらよいでしょうか。これはわたしたちにも耳が痛いのですが、神の民が時のしるしをとらえることができなかつたのです。目を覚ましていることができなかつた。外から、あれほどイスラエルが待ち望んでいたメシアの誕生が知らされる。しかも、それは神を知らない者たちと、ユダヤ人がさげすんでいた異邦人によってもたらされたニュースであったのです。新しい王の誕生が人々を不安にさせたというのはピンとこないかもしれませんが、つい先日、アメリカを騒がした大統領選挙、トランプ勝利かバイデン勝利か法廷にまで持ち込まれているあれをもっとすごくしたものと考えて頂ければよい。要するに法の支

配ではなく、人の支配の時代なのです。合衆国憲法をもつ法治国家であるアメリカですら指導者の選定によって国が割れるのです。古代社会では尚更です。指導者の交替はそのまま人々の生き死にに直結しています。新しい王の誕生はユダヤの人々の日常を変える可能性をもつ大事件だったのです。ユダヤ人にとって寝耳に水となったこの出来事は、神さまの御言葉を与えられている民にして、やはり日常の中では、日々を生きることに関わられて、神さまへの向かい合い方も習慣化している、つまり日常とは、わたしたちの想定の中で、経験の中で日々が営める、まわせるということですから、いうならば神さまの出番はないのです。あるいはもう少し細かく言えば、日々、御言葉に生きていても、神さまの時がきて新しい何かが示されるときには、その時々々に与えられた御言葉によって新しく状況を捉えなおさなければならぬのです。

この東方から三人の学者たちがやってきてイエスさまを拝んだ出来事は、異邦人による初めての礼拝で、いうならばユダヤ人の宗教から、世界宗教としてのキリスト教、すべての民を救う神の恵みが公けに確認されたという画期的な意味をもつ出来事です。ユダヤ人の側に見れば、神と人を取り次ぐ働きをなす「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」というモーセの時代に与えられた民族の使命の変更にも関わる大事件でした。これがクリスマスの出来事を考える時に、押さえておかなければならないユダヤ人側の事情です。実際、このことをなかつたことにしようとしてヘロデ王はこの後、ベツレヘム周辺の2歳以下の男の子を皆殺しにします。これは保身もありますが、起きつつある出来事の深刻さを本能的に察知していたことも見逃せません。

つづいて、わたしたち異邦人の先頭を切って、イエスさまを

礼拝した最初の3人である占星術の学者たちですが、これも非常に興味深い。ちなみにルカ福音書では最初の礼拝者は、その地方で夜通し羊の番をしていた羊飼いたちでした。彼らはみなユダヤ人ですから、最初の外国人の礼拝者は、この東から来た学者たちなのです。そして、彼らが言った「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」という言葉の中に、わたしたちが逃してはならない大切な招きがあります。まずふれておきたいのは、この3人は当時の最先端の学者であったということです。マジ=賢者と呼ばれたりすることもあります。占星術の学者というと「占い」をイメージしてしまい、正しく捉えられないと思うのですが、天体観測を生業としていたということは今風にいえば、当時の最先端の技術者なのです。なぜならば天体を観測し、太陽の動き、月の満ち欠け、北極星の発見、黄道28宿の動き、それらを観測して初めて暦が作られます。そして暦が作られることによって、人間の命がこの時の中に正確に位置づけられるのです。そして小麦を蒔く時期、雨の降る時期、刈り入れの時期など、すべての営みの基礎となる命のリズムが計測可能となるのです。それは天の理（ことわり）を理解しようとする事、神の意志に触れることでした。その彼らだったからこそ、ほうき星だったのか、どのような天体現象であったのか詳しくは分かりませんが、これまで積み上げられてきた観測結果にはないイレギュラーな星の出現に、時のしるしを目ざとく見て取ったのでしょう。しかし、異邦人はそれを説き明かす言葉を持っていなかった。古来、常ならぬ星の出現は世の中の変わるしるしと捉えられ、その出現の方角から、占星術の学者たち、あの時代最高の頭脳集団は、ユダヤに何か起きることを予測し、行動にでた。それは時のしるしを

彼らが「見た」からです。そして「どこにいますか」と探しに出た。ユダヤの方角へ、砂漠を横切ってです。ここには求道者の姿勢が見て取れます。求道者とは人生の意味を探し求める者のことなのです。人生の中に示されたしるしの意味を説き明かしたいのです。そこには人の生きる意味を問う真剣なまなざしがあります。彼らはこの時点で観測結果から導き出したおおよその方角と、王の誕生という推測から、ヘロデ王の宮廷を目指しました。それがさきほど申し上げたような驚きをもたらすのですが、そう聞かれてヘロデは、祭司長たちや律法学者たちを集めました。御言葉を取り扱う専門職ですね。東方から賢者たちの来訪とその目的をきいて、イスラエルも知恵を総動員する。そして、ここが大切なのですが、預言者ミカが取り次がれるのです。状況を解釈するのは、神の言葉なのです。わたしたちの助けは天地を創られた主の御名にある。既にこの預言が与えられていた。この預言が今、実現しようとしているのではないかと彼らは言います。「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちのなかで決して一番小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである」。こうしてついに向かうべき目的地が明らかにされます。するとそこに向かって星が動き始める。こうして学者たちは、新しく生まれた王、すべての人を救う神の御子を、ベツレヘムに見出し、礼拝をささげます。当時最高の頭脳が、なお神の御言葉によって人生最大の謎を解き明かされ、驚きに打たれて礼拝し、心からの宝をささげ、そして別の道を通って帰っていった。神が彼らに現れて、そう、救い主に出会った彼らにはもう神のお告げが直接、夢のなかで「ヘロデのところに帰るな」、と告げたので、別の道を通って帰って行ったのです。ここに神の御子と出会い、礼拝すること、真に膝を折り、拝む対象を得る

ことによってもたらされる新しい人生の道が示されています。たくわえた知識でも、かさねた経験でもなく、与えられる神の言葉に身を添わせることで、示しをうけて生きてゆく。そのような神と共に歩む道が開かれたのです。異邦人を照らす光は、こうしていまも御言葉の働きによって、人生の意味を見出そうとするすべての者たちを招きます。2020年のクリスマスを迎えたいま、この消息をもう一度、それぞれの人生の歩みに置きかえて、わたしたちも異邦人を照らす光となってくださった方の生涯と、そこに語られたお言葉に聴きたいと願います。そこから、新しい別の道が備えられることを信じてであります。

お祈りいたします。